



昨年度の阿蘇市人権作文集『かけはし』の作品の中から一部を紹介します。

皆さんもぜひ、家族や身近な人との関係を見つめ直し、人権や差別について話し合う機会を持ちましょう。

弟が生まれた

波野小学校六年
(現 波野中二年)

山口 優花

お母さんに陣痛が来たのは五月八日の昼ごろだった。(まだ、生まれないのかな)と思っていたころ、お母さんが、いつものお母さんとは思えない声で、

「痛いー。」

と、枕に顔を押しつけて顔をしかめていた。それが、ずっと続き、そのまま夜になった。お母さんは、

「今日、産まれると思うから、おとちゃんに電話して。」

と言った。私は、急いでおとちゃんに電話をした。私は、

「あ、おとちゃん。今、お母さん、陣痛が来るから早く車を出しとて。」とあわてて電話をした。

お母さんを見ると、息がハアハアして、

「うー。うー。」

とうなっている。私は、あわててお母さんがいつも読んでいた妊しんの本を何度も何度も読んだ。そして、

お母さんに必死で声をかけた。その間、福岡から来ていたおばあちゃんが荷物をまとめてくれた。

そうこうしているうちに、やっと、

おとちゃんが帰ってきた。おとちゃんを待っていたのは二十分ぐらいだったが、そのときは、一時間ほどに思えた。

お母さんは、おとちゃんに肩を支えられながら歩いて外へ出た。お母さんは、自力で歩くことができなかった。やつとのことで車に乗ると、お母さんは、また、

「うー。」

とうなりだした。私は、出産のことをテレビで見ても少しは知っていた。

だからお母さんに、

「あともう少しで、産院につくからね。」

と声をかけた。いつもと全然違うお母さんの様子にドキドキした。十一時ごろ、暗くてひんやりしたろうかを三人で歩いて分べん室に着いた。看護士さんに、

「ちょっと、待っていてくださいね。」

と言われた。私は、おとちゃんとうかで見つと待った。

時々、お母さんの、

「痛い。」

という声が聞こえた。そして看護士さんの、

「赤ちゃんもがんばっているから。」

という声が聞こえてきた。私は、(まだ、お母さんに会えないのかな)と不安になった。隣のおとちゃんを見ると、私より不安そうにしていた。

一時間ぐらい待っていると、助産士さんが出てきて、

「入っていいですよ。」

と言ってくれた。私は、急いで分べん室に入った。お母さんが、

「優花、お茶、取って。」

と言った。私は、すぐにお茶を渡した。

お母さんは、一瞬だけ笑顔になった。でも、また痛そうに顔をゆがめた。

時計を見ると、十二時を過ぎていた。(これから、もっと長くなるんだろうな)と思っていると、緑の服を着た人が、赤ちゃんの頭のようなところを手に取って引く張った。すると、

『ポン』

という感じで赤ちゃんが出てきた。私は、口をあぐり開けてわーっとした気分になった。

赤ちゃんの小さい小さい体には、まだ青白い水がついていた。その様子をみて私は、(ああ、ずっとお母

さんのお腹にいたんだな)と思った。赤ちゃんは、お母さんに抱かれると目を大きく開いてまばたきをパチパチとしていた。

私は二人つ子だったので、ずっと弟や妹がほしいと思っていた。本当に弟ができたと思うと、涙がじわつと出そうになった。お母さんは、赤ちゃんの顔を見て、

「かわいいねえ。」

と喜んでいて。私は、赤ちゃんの生まれるところを見て(自分のときも、この痛みにたえながら、私を産んでくれたんだな)と思った。

おとちゃんは、三日後、弟の出生届を出しに行つて帰ってきた。そして、

「今日からおまえは、心太郎だぞ。」

とうれしそうに、話しかけていた。おばあちゃんも、お母さんも笑いがから心太郎の世話をしている。

私は、お母さんのあの痛みを忘れないように、心太郎と元氣いっぱい過ごしていきたいと思う。

平成二十二年

阿蘇市人権作文集

「かけはし」より